# 1996年の国際千島列島調査

札幌市　高橋英樹

1996年の国際千島列島調査（International Kurile Island Project: IKIP）の記録を日を追って以下にまとめた。

**7月24日**

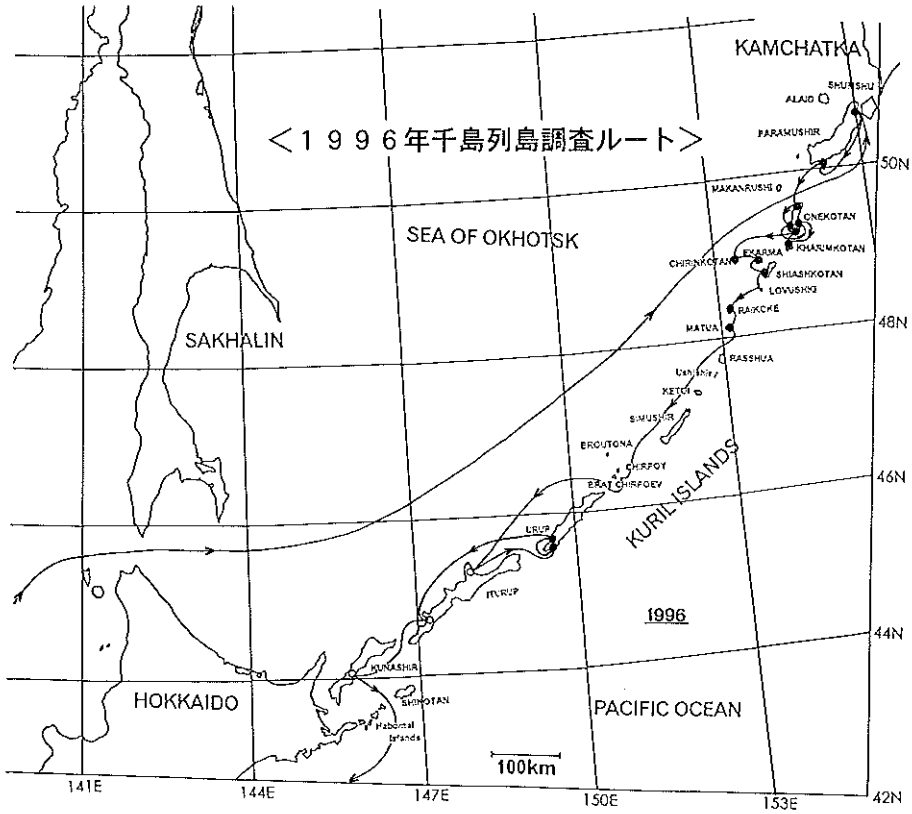
千歳から新潟へ飛行機で移動。夜は新潟市内で軽く一杯やって英気を養う。

**7月25日**

新潟空港を3時半に出発、あっというまにウラジオストックだが時差のため針を2時間先に進めるとローカルタイム夕方7時10分にウラジオストック空港に到着。金角港に停泊している調査船オパーリン号に乗り込む。

**7月26日**

ウラジオストック市内を見物する。展望台わきの道路縁の草地にはクサノオウやイチゲフウロ、エゾオオヤマハコベなどがあ



る。夜は30度と暑くなり寝苦しいくらいであった。

**7月27日**

市郊外の植物園に行く。植物園といっても野幌の森林公園に植物園が附属している感じである。それでも入場料金3000ルーブル(1円が約50ルーブルとして、約60円)取られた。一緒について来てくれたロシア人ガイドによると採集自由との事。イチヤクソウを採れたのが収穫だった。林道沿いにはノブキが多く、ウマノミツバ、ヤマブキショウマ、トクサ、ミヤマワラビ、クジャクシダなど、撹乱された所にはゴボウやオオバコなどがあるが、属は分かっても種類が分からないような物も多い。植物から見ると北海道よりは東北地方に近い感じを受けた。アメリカのメンバーも到着し、ようやく日・米・露の隊員がそろう。夜8時40分ウラジオストックを出航する。

**7月28日**

日本海を北上するがいまだ宗谷海峡に達せず。

**7月29日**

昼位に宗谷海峡を西から東へ通過。日本国籍らしい漁船も見える。北海道のすぐ近くをロシア船に乗って通過するというのも何とも不思議な体験である。

**7月30日**

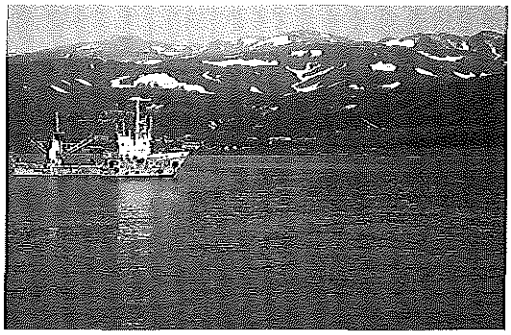
10時から船の中でミーティング。これからの予定や野外調査での注意がされる。このへんは去年も参加している強みで余裕だが、研究室の配分になると各々なるべく広くてよいところを取ろうとして真剣になってくる。私はヒーターで強制的に乾燥させて植物標本を作るのだが、部屋が暑くなるので皆にいやがられた。それでも何とかヒーターを研究室内に設置でき、標本を作れる体制が整った。

**7月31日**

千島列島域に入ったので、時計の針をさらに1時間先に進める。午前中にパラムシル島の西南でオホーツク海側から太平洋側に回り込み、昼くらいになると船の左にパラムシル島が見え始めた。午後3時くらいにはパラムシルとシュムシュとの間を進む。パラムシル島の山々には雪が映え、一方シュムシュ島の方は低平な台地状の島と見える。夕方、北千島最大の港町パラムシル島のセベロクリリスク(柏原)に到着。隊長のビクターが採取許可をもらいに町へ向かう。我らは明朝から採集できることを夢みて床に付く。

**8月1日**

早朝に船上から仰ぎ見ると、セベロクリリスクの後方には大雪山の山並のような景色が広がっている。港に上陸し、トラックで町の南側にあるウテスニイ川河口付近に移動しこのあたりで採集となる。海岸砂浜はマルバトウキ、シロヨモギ、ハマエンドウ、エゾオグルマ、ハマハコベ、ハマニンニクなど北海道と変わらない。丘陵地はミヤマハンノキの低木林となっており所々に



1、パラムシル島セベロクリリスク
(1996年8月1日)

小規模な高山草原がある。

**8月2日**

セベロクリリスクを出航してパラムシル島の西南バシレヴァ湾（武蔵湾）に移動。途中ひときわ近くに迫って見えるパラムシルの山並はすばらしい。船をベースキャンプにしながらの調査では高山まで行き着けないが、千島に来れただけでありがたいことなので文句は言うまい。

**8月3日**

バシレヴァ湾に上陸。あたりは軍事基地だったようで広い飛行場の跡もある。かなり種類豊富な高山植生だが飛行場跡にはムラサキツメクサやセイヨウノコギリソウなどの帰化植物も見られ、植物移動を考える上で興味深い。午後にはペルナトエ湖畔まで足を伸ばす。結局一日中一人での行動となり、昼飯もカロリーメイトでしのいだ。

**8月4日**

オンネコタン島の北はじネモ湾(根茂湾)に上陸。ここは館脇先生はじめ多くの研究者が入った場所でもある。海岸段丘の上までしっかり踏み跡道がついていた。段丘上はツンドラ植生で構造土のようにマウンドしている上にツツジ科のわい性潅木がマット状に広がっている。

**8月5日**

オンネコタン島アンギビ岬の北に上陸。小渓流沿いの斜面によい高山草原がありチシマルリソウが見事であった。母船への帰りは波が高く危険を感じた。

**8月6日**

午前9時にボートで出発予定だがうねりが強く上陸中止となる。オパーリン号は1日中海底生物採取のドレッジングをやっている。夕方になってオンネコタン島太平洋側のムッセル湾に移動して投錨。

**8月7日**

オンネコタン島ムッセル湾に上陸。カルデラにできたコリセヴォエ湖（幽仙湖）まで登山道がついているとの事で皆で出かける。上はガスがかかり風も強い。一瞬だけ湖面が見え一行の歓声があがる。登山道下部のミヤマハンノキ低木林は標高400 m以上からハイマツ林におきかわった。

**8月8日**

ハリムコタン島セヴェルギナ湾に上陸。海岸のすぐ後背地に砂丘が何列もあり干上がった湖の跡がある。ここにはイワブクロが非常に多かった。近くの廃虚近くにはアキタブキの1群があった。パラムシル島で

も見かけたのだが車上だったため採れなかった。人為的に持ち込まれたようにも見えるが分からない。

**8月9日**

オンネコタン島のトルドニイ川河口に上陸。私は標本を採りすぎ整理が追いつかないため上陸を断念。オンネコタン島の植物はすでにロシア側がかなり力を入れて調べている。

**8月10日**

チリンコタン島の北西に上陸。風が強く上陸地点を決めるのに手間取った。全体6 km²と小さな島で段丘部分がほとんどなく、海岸からすぐに涸れ沢を直登する感じで植物の種類は少なかった。夕方には続けてエカルマ島に上陸する。日が長いのでやれる作戦だが1島あたりの調査時間は短く、ややつらい。チリンコタンに比べればずっと種類豊富な島だった。

**8月11日**

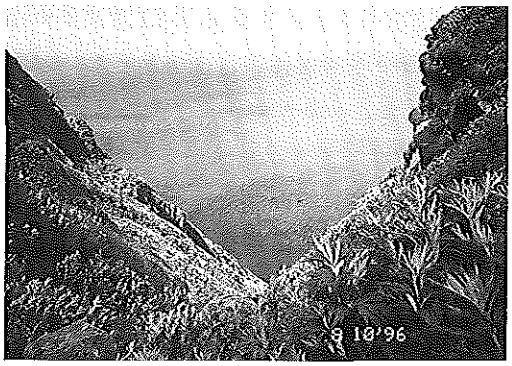
シャシコタン島のザカトナヤ湾に上陸。海岸付近のアキタブキ群落のふちで見たオオバナノエンレイソウが印象的であった。やはり子房は黒色だった。夕方3時とかなり早く母船に引き揚げる。調査隊員の一人が誕生日との理由だが、変な所で律儀なのがおもしろい。夜は誕生パーティーとなる。

**8月12日**

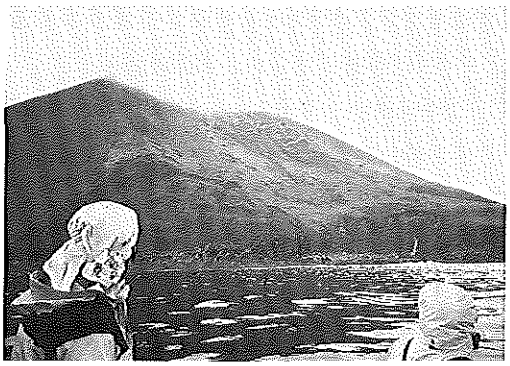
昨日と同じ場所に上陸。段丘上に上がるとミズゴケ湿原になっておりミツバオウレン、モウセンゴケ、ヒメシャクナゲ、ホソバノキソチドリなどがある。ここから川沿いに丘斜面まで上がり採取する。途中でシラタマノキを採った。

**8月13日**

午前中はトドの生息地として知られるロブシュキー岩礁（牟知列岩）に行くという。同乗している報道関係者へのサービスらしい。そんな時間があるなら島の上に1時間でも長く上げてくれ、と言いたくなる所だが、黙って母船に残って標本整理をする。帰ってきた隊員の一人は「トドだらけだった」とやや興奮の面もちだった。午後にラ



2、チリンコタン島（1996年8月10日）


3、ライコケ島（1996年8月13日）

イコケ島に上陸。5 km² と小さな島だが、広い火山灰の緩斜面下部に海鳥の巣が沢山ある。うっかりして巣を踏み抜いたりするわ鳴き声はうるさいわで、何とも落ち着きのない植物採集となった。

**8月14日**

マツワ島ドボイナヤ湾（大和湾）に上陸。戦前は日本軍の基地があった所だが現在はロシアの国境警備隊基地がある。基地まで案内されたあとメンバーはそれぞれ採集に出かける。海岸段丘の草原は種類豊富で、エゾイチヤクソウを採れた。

**8月15日**

再びマツワ島ドボイナヤ湾に上陸。アイヌ湾まで横断する。マツワ島での2日の採集で館脇先生の植物リストにかなり追加できたのは収穫だった。どうしても見渡しがきいて種類も豊富な高山草原に日が向くが、やや湿った高茎草本群落中には結構温帯要素的な植物が生育しており、狙い目であることを再認識した。

**8月16日**

チルポイかブラットチルポイ島上陸の噂が流れるが、結局は台風の影響で上陸は中止となる。波が高くなってきて研究室での仕事はつらくなってくる。

**8月17日**

雨はないがやや波が高い。昼くらいから晴れ間が見えてきたのでブラットチルポイ島への上陸を試みるがやはり風が強く撤退する。ここで船内の飲料水が底をつきエトロフ島へ水くみに移動するとのこと。

**8月18日**

エトロフ島レイドヴォ（別飛）の町に着く。町の北にある水くみ場に移動。海に滝の水が直接流れ落ちており、この滝の水をホースで船に引き入れるのである。

**8月19日**

同一地点で水くみ続行。

**8月20日**

ウルップ島ウクロムナヤ湾に上陸。徳長をつけて川沿いに内陸に入り、支流から尾根へと取りつく。ここでは去年採り損ねたツルリンドウを採った。とにかくブヨの多い所で左手が腫れるほどやられた。

**8月21日**

ウルップ島テチャエヴァ湾に上陸。内陸まで道がはいっているので何人かでこのルートをたどる。イグサ属の種類を結構採ったが全体にハイマツとダケカンバからなる単調な植生で途中で引き返す。海岸近くの草原は結構豊富だが、やがて帰りの時間となる。上陸時間は限られているので、上陸地点からどっちの方向に入るかで、出会える植生も違いその結果採れる種類も違ってくる。植物研究者が二人ずつ来ている米と露がうらやましい。

**8月22日**

エトロフ島ドブロエ・ナハロ湾（内保湾）。

左にアトサヌプリ、右手奥に西単冠山と大パノラマである。日本隊は上陸できず。

**8月23日**

同一場所。米・露の隊員はドブロエ湖(内保沼)まで行ったそうである。

**8月24日**

クナシリ島ユジノクリリスク(古釜布)着。日本隊は上陸できず。

**8月25日**

同一場所。採取許可の関係からか千島列島調査の最後はクナシリ、エトロフ島に寄ることになるが、日本隊は政治上の理由で上陸できない。今日は1日中手持ち無沙汰で、洗濯をする。

**8月26日**

夕方ユジノクリリスクを離れる。前甲板で記念撮影など。

**8月27日**

右手に日高山脈を見ながら船は西進する。午後から研究成果の発表会をおこない夜はお別れパーティー。

**8月28日**

一日中二日酔いで苦しむ。

**8月29日**

朝ラウジオストック帰着。

**8月30日**

ウラジオストック生物土壌学研究所に連れていってもらう。若い植物研究者バルカロフに会えたのは収穫だった。植物標本室は北大農学部の標本室くらいのスケールがあり特に極東ロシアの標本は充実していた。ただ研究者の上下関係はかなりきつそうで若手の研究者同士が日露間で自由に行き来して共同研究できるようになるにはまだ時間がかかりそうである。

**8月31日**

若い日本隊のメンバーは今日も市内に出かけるとのこと。私は港周辺の植物採集をした後は船でのんびりする。

**9月1日**

ウラジオストック空港から出国。書類に不備があり標本類を持ち出せなかったが、これは後で無事日本に着いた。ただ最後の日に港周辺で採った標本は生乾きだったので結局かびてしまった。

今回の調査で一緒した日本隊の矢部先生、加村さん、桑原さん、大原さん、北海道テレビの四宮さん、長村さんには色々お世話になりました。調査のアレンジにあたっては水産学部の尼岡先生に大変ご苦労をかけました、記して感謝致します。